

61 歳からチャレンジ - San Diego の 10 年間

2000 年 1 月、娘が結婚した。これで、渡米の決心がついた。2001 年 6 月、37 年間勤務した上場企業の役員を辞任し、友人の住む San Diego に行き、語学学校に通い始める。61 歳から外国語を学ぶのは簡単ではなく、特にヒアリングの難しさに苦勞した。TOFEL の Listening の点数を諦め、Reading と Grammar に努力し点数を増やした。その間、TOFEL6 回、GMAT（経営大学院の為の入学適性テスト）3 回受験した。

2004 年 4 月、念願であり長年の夢であった MBA（経営大学院 - Master of Business Administration）に合格。Alliant International University に 9 月から通学した。大学院の授業は、専門科された授業でクラスの誰一人語学には無関心であったので、ヒアリングを意識せずに専門分野の Research を行うことができた。クラスの人数が 10 名から 30 名と少数で、どのクラスの授業も楽しく過ごせた。特に Business のクラスは 80 年代の日本経済の躍進した事例の討議が多いので経験者としての意見を常に求められた。予習以外はゴルフと週 1 回のストレッチで健康を維持した。2006 年 5 月予定通り MBA を卒業した。

66 歳であったがチャレンジ精神は衰えず、2006 年 9 月、DBA（博士号課程- Doctoral Business Administration）に入学した。博士課程のクラスはさらに少数で 3 名のクラスもあった。この場合、予習の負担は大きくほとんど与えられた資料のタイトルを棒読みしどんな内容を把握して、クラスの討議に参加した。DBA に必要な 51 単位を 3 年間で終えるため週 2 科目で受講し、博士論文の作業に 1 年半要したが 2010 年 5 月 DBA を卒業し、Strategy Management の博士号を得た。

博士論文は 300 頁を超えたが、日本の会社の社長 5 名のそれぞれの 1 週間の仕事を細分化した項目にまとめ日本の社長の仕事とは何かを分析した。その英文添削をプロの editor に依頼したが、日本文化と企業習慣を editor に理解させるのに苦勞した。特に日本文化が 4 文字熟語で表現されるが、その翻訳文を作るのに時間を要した。

博士号取得後は日本に帰国。Coaching の License を取り日本で社長の行動（振る舞い）に対するアドバイスの仕事をする。例として「エグゼクティブの言動がどのように周囲の人々に受け取られているか、特に本人が気づかないでいる悪癖をコーチが周囲の人々を使って気づかせ、その悪癖が認識できるなら改善への手助けをする」というものがある。

また、アカデミック誌への投稿し、2013 年 8 月「The Nature of the Chief Executive's Work in the Japanese Company: Analysis from Observation」を「The Journal of International Management Studies, Volume 8 Number 2, August, 2013」に掲載した。ここで苦勞したことは、原稿の長さに制限があることと、日本企業の習慣をどのように英語で表現するかであった。幸い、日本人の Editor に恵まれ納得の行く原稿が書けた。